〈グラビヤ特集〉

育ちゆく熊本林業

写真は内大臣にて

山林の要所には防災標識が……

筑紫　最近は、多少変って、一年目には、ぼつぼつ立てるようですね。もっとも、寿命が概ね四年ですから早く立て始めると早く終りがきますが。

――　しいたけというのは面白いんですね。今年しいたけが出なかったのは、温度が非常に高かったからだと、その後になって温度が低くなったため、出ようとしてたのが引込んだのだそうですが。そうすると今度涼しくなると、又出てくるもんですか。（笑）

筑紫　いや、そうじゃありません。たしかにこの冬は十二月ごろから暖かくて二月に二十八度ぐらいになったりしましたので、一斉に出てしまったのです。そして、そのすぐあとが雨だったもんで、採取のタイミングも合わずに、皆、腐ってしまったのです。球磨地方が特にひどかったようですね。

――　やはり、しいたけ用のくぬぎとパルプ用のものとでは、少しは価格が違いますか。

魚住　大分違いますね。山で伐るとき、伐りわけておくんですよ。

宮本　私どもの方も、立木で売買契約をいたしますとき、ナバ木の多いところでは、ナバ木は除くという条件で契約いたしますこともあるわけです。

木材の流通体系確立へ……

魚住　これは十条さんにお願いなんですが、地元の林業を育てていくという意味で、なるべく地元の材を生かしていただきたいと思うんです。かねがね、農林産関係で、一番弱い点は、流通面だと思っているんですが、例えば畜産の場合、ちょっと価格が上ると、輸入肉が入ってくる。需要がみたされないほど、肉が不足しているとは思えないのだが。

野菜にしても、流通機構というものが何ら考えられていない。で、これを何とか、体系づけていきたいと思うので、まず、私の方の森林組合で、市場を開設することを話し合ってお願いしたわけです。できるだけ組合を通して扱うような方向に、協力していただいています。

宮本　私も同感です。特にパルプの立木の流通問題で感じることは、第一次産業としての林業の持つ宿命のようなものかも知れませんが、全国的な、大変重要な問題だと思うのです。昨年秋から、山元の生産が非常に順調なのですが、実はこれは山元の増産ムードからきたものではなくて、いつ、出せなくなるかも知れないという先行きを心配しながらの、稼働日数だけがのびていった。その結果からきたものだと解しておるわけです。その結果、これは九州各社、全く同じケースをたどったのですが、やはりダブついてきた。生産の波とちがいまして、工場の使用量は一定しておりますので、どしても三月、四月頃から滞貨が目立ってきました。工場土場に、収容できる限り精いっぱいの収容をいたしまして、三万五千m³入るところに七万八千m³が収容されているような様子です。

これは、誰をうらみようもないのでありますが、出るときはどっと出る。出ない時は、昨年のようにガックリ出ない（笑）という、このバランスをですね、どうして調整するか。（これは生産者の金繰りの問題とも直結すると思いますが）何か、大きな横の機構のようなもので調節され、それに対する資金的な裏付けといったことまで考える道はないものだろうかと考えるのですが。原木の流通と、調整の問題を一工場だけではどうにもならない。何か、大きな場で、することができないでしょうか。

〝第三の紙〟は大衆化するか

――　パルプは、木材以外のものを使うようなことになるでしょうか。

宮本　ええ。第三の紙などと、大変論議されていることなんですが、一応いろんな化学繊維が出ております。しかし、やはりコストの点と、新聞用紙等のように大量に要求されるという点で、或いは紙のマシンにかかった時の状態などの技術的な点で、残されている課題がありまして、まだまだ一般化はしないようですね。ただ、食糧品包装紙などのような特殊な用途は考えられます。その場合、特色を生かしたものができるかも知れませんが、いずれにしても、大衆化されるまでになるかどうか。

――　近頃、障子紙なども破れないようなのが出ておりますね。

宮本　あれなどは、ほとんど化学繊維ではないかと思いますが、やはり、日本人の生活の中で、木造の家屋、紙の障子などの環境への魅力はどうしても、残されていくようですね。

菅野　さきほど、竹のパルプ二〇％程度までは使えるというようなお話がありましたが、現在、竹加工業者が生産いたします過程で、日産三十トンばかりの廃品がでております。

宮本　ええ、竹業者の方からいろいろお話も聞いております。竹チップの場合

（36頁へ）